サービスラーニング科目「アメリカ社会活動」オンライン版の意義と可能性

山　崎　慎　一

桜美林大学グローバル・コミュニケーション学群

Constructing an online community engagement program
in the case of "Int'l Service Learning: Social Activities in the USA"

YAMAZAKI Shinichi
College of Global Communication, J. F. Oberlin University

キーワード：サービスラーニング、オンライン、アメリカ

1. はじめに

2019 年から始まった新型コロナウィルス感染症（COVID－19）は、感染者の増減と新たな変異株の出現を繰り返しながら今に至り、2022 年以降も引き続き人類は新たに生まれた感染症とともに生きるものと思われる。日本においては、一時期の感染者の増大は抑えられているものの、度重なる変異株の出現により先を見越した政策立案は困難な状況となっている。例えば留学生の入国許可についても、2021 年 11 月に実施予定であったものの、急遽再度延期されることとなった。各大学においては、対面授業を求める声と新型コロナウィルス感染症への不安の訴えに板挟みされており、いわゆるハイブリッド型と呼ばれる対面型授業とオンライン授業の組み合わせや、学生が自由にそのどちらかを選択できるハイフレックス型の導入など、教育機会の提供のために様々な試みがなされている。

本論はコロナ禍の中、2020 年度秋学期に実施した桜美林大学の海外サービスラーニング（SL）科目「国際理解教育（アメリカボランティア研修）」のオンライン版の実践報告論文である。この科目は、例年では当該年度の 11 月頃に履修に関する説明会を行い、費用の支払いや履修登録の後、12 月～ 1 月にかけて事前学習を行い、2 月にアメリカのサンフランシスコを 3 週間程度滞在して現地研修を行い、帰国後の 3 月中に事後学習を実施する形としている。しかし、2019 年度末より世界的に広がった新型コロナウィルス感染症

の影響により、2020 年度は Zoom を用い、現地研修も含めた全てのプログラムをオンラインで実施した。なお、当該科目は現在海外 SL「アメリカ社会活動」の名称となっていることから、本論における科目の説明は「アメリカ社会活動」とする。
本論の分析対象とする科目「アメリカ社会活動」の授業概要について、当該科目のシラバスを参照し以下に示す。

> *アメリカ西海岸のサンフランシスコ市内において、NPO などによって行われているボランティア活動や社会貢献活動について、実施者、経験者、知識を持つ方など、様々な人々からオンラインによる現地フィールドワークを研修として理解を深めていきます。履修学生は、このオンライン研修を通じて、アメリカ社会の様々な階層の人々、人種や移民国の文化の違い、あるいはそれらが共生している状況を理解すると同時に、アメリカ社会が抱える様々な社会問題、またそれらの問題の解決に立ち向かっている NPO やボランティアの姿を理解することを目指します。アメリカ社会に根付いているボランティアの精神や活動をオンライン研修から深く理解することを目的としています。アメリカの現地の人々との交流や、サービス活動等に関するオンラインの研修期間は約 3 週間程度を予定しています。適宜通訳等を介すため日本語のみでも参加可能ですが、オンラインを介して直接の英語の声を聞くという意味では、学校で学ぶのではない、生きた英語を身近に感じて、社会の中のさまざまな人々とコミュニケーションをとる機会があります。積極的に英語を使う姿勢があると、アメリカ社会の様々な姿を感じ取ることができます。*
>
> （山崎，2020）

科目の到達目標としては、アメリカ社会の問題点の認識、その市民社会のボランティア精神の理解、日本のボランティア活動や市民社会に対する関心を持ち調べられるようになることであり、加えて SL 科目の目標として、現地研修で行う社会活動を通じて人々と関わり地域の問題を解決することと、地球市民としての意識や人間力等を養うとしている。また、現地研修の中では人と人との繋がりの構築に重きを置いている。なお、オンライン版の「アメリカ社会活動」の授業概要や到達目標は、オンライン研修を行う旨を示した文章以外は対面時からほとんど変更せずに科目を実施した。

本科目を実施した桜美林大学の状況を振り返ると、日本の私立大学の中で比較的早くから Zoom によるオンラインの双方向型授業を展開しており、授業のオンライン化に向けた取り組みを成功させた一つの事例と言える。2020 年度はほぼすべての科目がオンラインで展開され、2021 年度の春学期も一定の科目はオンライン、2021 年度の秋学期は原則対面のもとで、発熱や体調不良者、基礎疾患がある者などに配慮をしつつハイブリッド型授業が実施されている。「アメリカ社会活動」については、具体的な内容を検討する 2020 年度当初はまだ新型コロナウィルス感染症への対応の混乱期であり、今以上に先を見通すこ

とが難しい状況であった。当時のアメリカの感染者数や新型コロナウィルス感染症への対応状況は芳しくなく、現地コーディネーターもロックダウン環境下の中で物理的にも精神的にも仕事を進めることに困難が生じていた。しかし、先を見通せないからこそ、新型コロナウィルス感染症の影響を踏まえた新しい SL 科目の開発は必須であり、また、これまで、学生の健康面や経済上の理由により本科目を履修できない事例もあったが、これらの課題を解決し、プログラム参加機会の拡大可能性を見込み、今回のオンラインによる実施を一つのチャンスと認識してオンラインプログラムの検討を進めた。本論は、こうした背景をもとに、2020 年度にはじめて実施をしたオンライン版 SL 科目「アメリカ社会活動」の実践報告であり、科目特性上オンライン化が困難である SL 科目のオンライン化の意義と課題を事例から提示するものである。

2. 日米におけるオンライン版 SL の研究動向

SL 科目のオンライン版に関する先行研究は、2021 年 12 月 2 日時点の CiNii を用いた検索によると、オンライン版と対面版の効果について、学生、教員、地域パートナーの 3 者から比較考察した論稿（坂本，2021）のみ確認できた。しかし、現在は教育研究活動の安定的な継続が難しい状況であり、例えば桜美林大学においても多くの SL 科目は閉講を余儀なくされている。研究面を見ても、2020 年 10 月に「新型コロナウィルス感染症の影響に伴う科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）の補助事業期間の延長の特例について」の通知が出されるなど、研究活動の予定通りの継続が困難であることが示唆されている。

その一方で、アメリカは新型コロナウィルス感染症の流行以前からオンライン教育は日本よりも進んでおり、すでに様々な試みがなされている。アメリカのオンライン版 SL の関連文献と事例を収集し、用いられているキーワードや実施形態別の分類などを総合的に試みた論考（Waldner et.al., 2012）や、2010 年から過去 10 年間の SL 科目のうち、サービス活動自体をオンラインで実施したものに焦点をあて、その動向や課題を明らかにしたもの（Emily, 2021）など、オンライン版の SL 科目の研究自体は一定程度なされている。オンライン版 SL（e-service learning）は、4 つのタイプに分類され、サービス活動のみをオンラインにするプログラム、講義のみをオンラインにするプログラム、双方をオンラインにするプログラム、全てを組み合わせるハイブリッドタイプがある（Waldner et. Al., 2012, pp134）。本研究は、上記の分類に照らし合わせれば、サービス活動も講義もともにオンラインで実施をするプログラムであるが、この分類が提示された当時はまだ新型コロナウィルス感染症の問題はなかったため、オンライン利用の前提条件が異なっている点に留意する必要がある。これを踏まえ、アメリカの教育学文献データベース ERIC において、コロナ禍のオンラインの SL に関する文献について、データベースの統制語「Service learning、Distance education、Higher education」を用い調べたが、Weisman（2021）の「Remote Com-

munity Engagement in the Time of COVID-19, a Surging Racial Justice Movement, Wildfires, and an Election Year」の 1 件のみであった。したがって、日本だけでなく、アメリカの事例を見ても、コロナ禍への対応を踏まえたオンラインの SL に関する研究は少なく、事例研究を着実に積み重ねていく必要がある。ただし、新型コロナウィルス感染症の流行からさほど時間も経過しておらず、大学のみならず世界的にも混乱が続いているため、現在は限られた研究報告数であるが、将来的には様々な事例報告や研究活動が実施されると考えられる。

3. 実践報告

2019 年末に発生した新型コロナウィルス感染症の世界的な流行により、高等教育の世界は大きな変化を強いられることとなった。本報告の対象とする SL 科目「アメリカ社会活動」も、桜美林大学の多くの科目と同様にオンライン化を進めることになった。科目の基本情報については大きな変更をせず、2 単位（履修上限外科目）、対象は全学群の 1 年生から参加可、費用は 3 万円と設定した。費用については、オンライン化を急遽進めることとなったため、最低限の経費のみを計上し、かつ桜美林大学による「短期海外研修奨励制度」の上限額と合わせている。新型コロナウィルス感染症の影響により、経済的に困難な状況にある学生は増加傾向にあり、授業料の支払いが滞るケースや、PC の購入費用などの本来生じない支出も生じていたため、参加学生が負担なく学びを続けられるように設定した。

本科目は SL 科目であり、現地研修に参加するにあたって必要な知識を得る（1）事前学習、（2）オンライン現地研修、そして現地研修の学びを振り返る（3）事後学習から構成されている。本科目は、アメリカを訪れて直接コミュニケーションをとるということをせず、活動も共にしない中で、どのように科目としての目的を達成し、日米間、あるいは履修する学生間で繋がりを構築していくかを最も重要な課題として構築を進めていったものである。

（1）オンライン事前学習

オンライン化する以前の本科目において、事前学習は参加学生がアメリカの社会や文化を学び、現地で実施するサービス活動について理解を深め、実際の海外渡航に伴う手続きや現地での生活文化などを学んでいる。しかし、オンライン化にあたり、実際に渡航を要さないため、生活のための知識は学ぶ必要がなく、現地での活動もできないため、これまで対面で実施してきた事前学習から様々な変更を加えている。アメリカのこと自体を知るという観点から、文化や社会問題に関わる内容を増やし、新型コロナウィルス感染症やマスクの認識に関する文化的差異なども説明した。また、実際に渡航できない状況を踏まえ、少しでも実際どうなっているかを把握できるようにするため、アメリカの貧困問題をテー

マにしたドキュメンタリーを視聴し、格差の問題、貧しい人々の社会的成功の阻害要因、税金の在り方、ボランティア活動の意義等について議論するグループワークを実施した。オンライン版の事前学習は、オンラインでの現地研修と自らのサービス活動の意義を確かめられる準備期間として位置付けている。

(2) オンライン現地研修

2020 年度の本科目は、全ての現地研修を Zoom によるオンラインにて実施した（表 1）。

表 1：アメリカボランティア研修スケジュール（2020 年度秋学期）（筆者作）

アメリカボランティア研修スケジュール（2020年度秋学期）

サンフランシスコ（PST）			日本（JST）				主たる学習・地域貢献活動
現地研修開始時刻	現地研修終了時刻	曜日	**現地研修開始時刻**	**現地研修終了時刻**	**振り返り終了時刻**	**曜日**	現地研修内容
2/12 16:00	2/12 18:00	金	**2/13 9:00**	**2/13 11:00**	**2/13 12:00**	**土**	（1）イントロダクション （2）NGOについて　現地コーディネーターの説明
2/15 16:00	2/15 18:00	月	**2/16 9:00**	**2/16 11:00**	**2/16 12:00**	**火**	（3）NPOスタッフのビデオ上映＋次回のライブトークの質問を考える （4）南山大学の学生のNPOについての発表
2/19 16:00	2/19 18:00	金	**2/20 9:00**	**2/20 11:00**	**2/20 12:00**	**土**	（5）NPOスタッフとのライブトーク *現地研修終了後、11:00～12:00で振り返りとフォローアップを日本の方だけで実施
2/22 16:00	2/22 18:00	月	**2/23 9:00**	**2/23 11:00**	**2/23 12:00**	**火**	（6）日本語プログラムについて　現地コーディネーターの説明 （7）日本語の先生とのライブトークの質問を考える
2/26 16:00	2/26 18:00	金	**2/27 9:00**	**2/27 11:00**	**2/27 12:00**	**土**	（8）日本語の先生とのライブトーク *現地研修終了後、11:00～12:00で振り返りとフォローアップを日本の方だけで実施
3/1 16:00	3/1 18:00	月	**3/2 9:00**	**3/2 11:00**	**3/2 12:00**	**火**	（9）日本語プロジェクト①　パワポプロジェクト（あいうえお）
3/5 16:00	3/5 18:00	金	**3/6 9:00**	**3/6 11:00**	**3/6 12:00**	**土**	（１０）日本語プロジェクト②－１　日本文化動画プロジェクト
3/8 16:00	3/8 18:00	月	**3/9 9:00**	**3/9 11:00**	**3/9 12:00**	**火**	（１１）日本語プロジェクト②－２　日本文化動画プロジェクト （１２）まとめセッション *現地研修終了後、11:00～12:00で振り返りとフォローアップを日本の方だけで実施

その他の予定：マスクプロジェクト

オンライン現地研修の活動時間については、本学 SL 科目の認定条件として 20 時間以上を確保する必要があることから、1 日当たりおよそ 3 時間、計 8 回の現地研修を行った。この研修は大きく分けると、(1) イントロダクション、(2) ～ (5) の NPO 関連、(6) ～ (11) の日本語プロジェクト関連、(12) まとめの 4 つのセクションに分けられている。そのため、NPO 関連と日本語プロジェクト関連の終了後には、現地研修期間ではあるが、振り返りの時間も別途設定している。加えて、上記の期間内において、現地へのサービス活動の一環として、手作りマスクを作成する「マスクプロジェクト」のボランティアも同時進行した。

イントロダクションでは、現地コーディネーターによるオンライン現地研修内のボランティア活動内容の説明や、新型コロナウィルス感染症以前の活動の様子の紹介等から構成されている。動画や写真、さらにはライブ配信等を用いて説明するとともに、可能な範囲でサービス活動の対象となる人を示し、履修者が誰のためにそのサービス活動を展開するのかを意識づけるよう説明をした。

NPO 関連のセクションでは、フードバンクの職員から動画の提供を通じた活動紹介を踏まえた上で、その後に行うオンラインでの交流の際に用いる質問を履修学生と現地コーディネーターが議論をしながら作成した。本科目は日本語のみで受講可能な科目であるが、実際にアメリカに行った際は必ず英語を喋る機会があることを踏まえ、適宜英語表現の指導を受けつつほぼ全員が英語による質問文を作成した。また、現地コーディネーターの運営する類似の研修プログラムに参加経験のある他大学を卒業した学生で、アメリカでのボランティア活動経験も持っている者から活動に関する説明や体験談を共有した。NPO 職員のライブトークでは、先に準備をした質問をもとに、現地コーディネーターの一部通訳のもと質疑応答を行い、コロナ禍の貧困層支援活動について実際に活動を行う現地関係者からの話を聞いて理解を深めた。

日本語プロジェクトは、現地の初等教育機関において実施されている日本語教育プログラムに対し、教材開発を通じてサービス活動を実施するものである。はじめは現地の日本人の先生の講義と意見交換から、現地の児童生徒から求められる教材を検討した。教材の内容は、ひな祭りとこどもの日となり、その後、現地コーディネーターの指導を受けつつ、平易な英語と日本語を用いた教材ビデオを制作した。

まとめのセクションでは、現地コーディネーターによるこれまでの振り返りが行われた。この際、単に現地コーディネーターが感想を述べるのではなくこれまで携わった人々の動画やコメントも多々紹介され、履修学生のサービス活動がどのように伝わっているかについても様々な形で説明がなされた。合わせて、オンライン現地研修とサービス活動への参加を証明するデジタル証明書も発行されている。

これらのオンライン現地研修と並行し、現地へのサービス活動として「マスクプロジェクト」を実施した。「マスクプロジェクト」は、各学生が材料を購入し、マスクを作成し、メッセージカードを添えて郵送にて届けるものである。当時、アメリカでは、特に貧しい家庭においてマスクが不足している例や、同じマスクを使い回すことによる衛生面の懸念、子ども向けのマスクがあまり見られないといった問題があった。これらの問題を受け、オンラインになる以前の当科目の履修経験を有し、現地コーディネーターの助手を務めた学生の発案をもとに企画された。さらに、アメリカにおけるマスクの需要が想定以上に高いことが明らかになったため、急遽「家でもできるボランティア―サンフランシスコの子どもたちにマスクを送ろう！」と題して、学内の教職員や学生が利用する電子掲示板である e－Campus 等を経て本科目の履修者以外の学生の協力を呼び掛けた。春休み期間の 2 月の 2 週間程度という短い募集期間であったが、卒業生 1 名も含めたおよそ 20 名の学生が参加した。結果的に、現地コーディネーターへの郵送を通じ、本科目の履修者と合わせておよそ 200 枚のマスクを貧困地域の学童の子どもたちへ届けた（図 1）。

図 1：制作されたマスクとメッセージカード [1]

(3) オンライン事後学習

事後学習について、本科目をこれまで対面で実施した際は、アメリカからの帰国後の振り返りと報告が主たる内容であった。しかし、オンライン現地研修では、帰国の概念が存在しないため、振り返りに加え、学生自身のオンラインでのサービス活動の経験を踏まえた上で、改めてアメリカの文化や社会に関する講義を受ける機会を設けた。講義の担当者は、カリフォルニア在住経験があり、UCLA において日系移民研究により博士課程を修了した他大学の教員である。先に送付したマスクについては、現地コーディネーターからの Zoom による画面共有を経て、学童へ送り届けた様子や、子どもたちが実際にマスクをしている様子や感謝を示すメッセージ動画や写真が共有された（図 2）。さらに、マスクの受け取り先となった学童の管理運営等を担う責任者と Zoom を繋ぎ、改めて履修者への感謝が伝えられるとともに、サービス活動の意義や重要性についても説明を受け、履修者との質疑応答も活発に行われた。

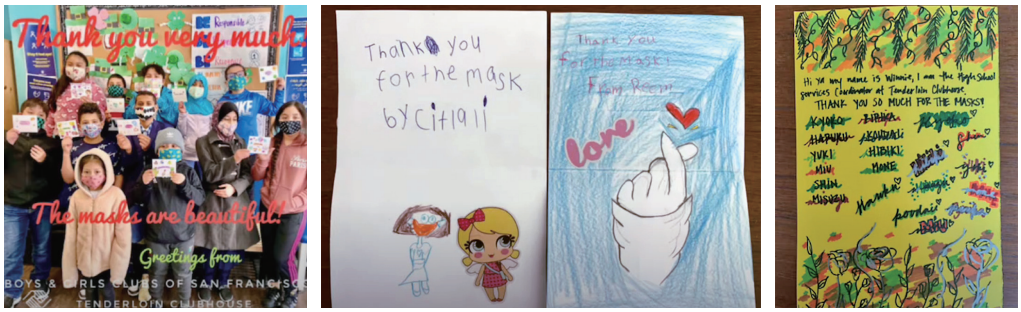

図 2：マスクの御礼として送られてきた動画の一部とメッセージカード [1, 2]

4. 考察

新型コロナウィルス感染症の世界的な流行により、2020 年度秋学期の SL 科目「アメリカ社会活動」は急遽オンラインで展開することになった。ここでは上記の報告を踏まえた

上で、その成果と課題について考察する。

4ー1　オンライン版SL科目「アメリカ社会活動」の成果とその要因

新型コロナウィルス感染症の影響は、本学のみならずあらゆるところにあり、教育機関は学校の閉鎖やオンライン化などを強いられ、「学びをどう継続するか」ということ自体が一つの課題であった。特に、本科目のようなSL科目は、実際の現地への訪問や、フィールドワークが伴う学習活動に特徴を有しているため、中止を余儀なくされているプログラムも見られる。その意味において、SL科目「アメリカ社会活動」をオンラインにて実施し、15名の履修者がその時できる形でのサービス活動に関わり、学習を継続できたことに一定の意義がある。現地コーディネーターが、様々な行動制限がある中で、Zoom、動画、写真などを用い、サービス活動の対象を見える化し、双方向性を持たせたことは、本科目の大きな目的である「繋がりを作る」ことにも寄与している。また、現地研修の一環として実施した「マスクプロジェクト」については、履修者以外の本学学生や卒業生に対しサービス活動の機会を作り、本科目の枠を超えた波及効果を創り出すに至った。

本科目の実施において、大学のオンライン化への対応とそれに対する学生の慣れも科目運営を適切なものとする上で重要である。桜美林大学は、2020年度開始時よりZoomを用いた双方向性のあるオンライン化を進めており、それに対する費用補助、PC等の機材提供、事務的支援システムの構築など種々の支援を行ってきた。これにより、2020年度秋学期時点において、学生はZoomで授業を受けること自体に慣れており、オンライン環境における質問や議論、共同作業を伴う学習活動についても大きな問題なくできていた。大学の学生と教職員、そして現地コーディネーターも含めてオンラインによる授業に適応していたことは、本科目を効果的に運営するために必要な要素であった。さらに、費用面については、桜美林大学の短期留学奨励金がオンラインの国際的な活動にも適用されたため、本科目のプログラム費の3万円を相殺できたことも、学生の負担を軽減する上で有意義なものであったと言える。

また、本科目の運用にあたり、オンラインのSL科目を独自に構築していくことを心掛け、科目の目的を踏まえつつ、これまでの対面によるサービス活動とは異なるプログラム作りを意識していたことも、本科目がその到達目標に達成できた要因であると考えられる。これまでの「アメリカ社会活動」は、実際にアメリカに行き、数週間の間にボランティア活動を行いながら生活をしていく中で、事前学習で学んだアメリカの社会や文化を体験的に学び、帰国後に振り返っていく過程を経ている。しかし、オンライン版の本科目においては、事前学習、現地研修、事後学習はシームレスであり、ほぼ全ての学習活動が自宅の端末上で完結する。そのため、実際に行くことと同等の経験をすることは不可能であり、SL科目としての目的を維持しつつ、オンラインでできることを検討していく必要があった。本科目の運営において、桜美林大学サービスラーニングセンターはじめ、現地コーディネーター、担当教員らがこうした柔軟性を有していたことは、コロナ禍の中でもSLの

学習機会を続けられた一因である。

4ー2　学生の視点から見たオンライン版SL科目「アメリカ社会活動」の利点

これらの効果については、本科目の事後学習時における振り返りに加え、科目実施からおよそ9か月後の2021年12月に実施した履修者2名へのインタビューでも言及されている。インタビューにおいて、日本語プロジェクトとマスク制作については、自分たちの制作した動画やマスクが誰に使われるかがオンラインのやり取りを通じて見えていたことにより、現地研修時のサービス活動のモチベーションを維持することができたと指摘されている。本科目におけるオンラインの現地研修は、作業を分担して行うことも多かったため、一人で作業をするだけになる時間もあった。そのため、時に孤独で淡々とした作業をする中で、「誰に向けてのサービス活動か」が明確になっていたことは、現地研修を実施するうえで有意義であった。また、送り届けたマスクが実際に使われ、子どもたちが喜んでいる動画や写真を見たり、それに対して手書きメッセージが送られてきたりしたことは、達成感ややりがいに繋がっている。これらのインタビューや事後学習時の振り返りの中で、今度はオンラインではなく実際にサンフランシスコに行ってサービス活動をしてみたいと考え始めた学生も少なくなく、オンラインのサービス活動は現地でのサービス活動へと繋ぐものとしても機能することが示唆された。

4ー3　オンライン版SL科目「アメリカ社会活動」の課題

先に挙げた様々な成果の一方で、本科目を運営するにあたっての課題も見られた。現地研修やサービス活動は、最終的にはある程度その成果は見えるものの、作業をしている時点では相手の顔が見えづらく、通常の授業において課題に取り組むことと変わらないという意見も見られた。また、本科目はアメリカを対象とした海外SL科目であり、履修者は実際にアメリカに居住する人々から話を聞くことへの期待が見られた。しかし、本科目は英語の語学能力を要件としていないため、語学力のばらつきが大きいという問題があるものの、実際に現地の人とZoom上にて触れ合う機会が十分ではなかった点もある。科目の運用としては、当時は新型コロナウィルス感染症に対する国々の対策も異なり、手探り状態の中で行われることもしばしばあったため、スケジュールや活動内容の急な変更も多く、プログラムとして確固たる内容を持つには至れなかった。しかし、プログラムの運営については、元々予定していない形でオンライン化を進めたことを考えれば、次回以降は安定的に種々のオンライン学習活動を提供できるようになると考えている。

4ー4　オンライン版SL科目の今後の可能性

これらを踏まえた上で、今後のオンライン版SLの運用とその可能性について以下に言及する。筆者が協力者として、2021年夏に日本私立大学協会加盟校の国際関係部門担当者に対し実施をした「コロナ禍の国際交流事業に関するアンケート調査」では、オンライ

ン版の国際交流プログラムの位置付けについて、半数程度は渡航再開後も現状維持か併用と回答しているが、残りは補助的な位置付けや一時的な措置に留めると回答している（山崎，2021）。確かに、実際に渡航し現地で経験することはかけがえのないものであり、オンライン版のサービス活動は現地における実体験には及ばないという限度もある。しかし、その一方で、オンライン版 SL 科目は、学習機会を広げるという意味において優れており、自宅で、しかも安価にサービス活動に携わる機会を提供できる。オンラインでのサービス活動から、実際に現地で行うサービス活動への関わりを促すことができれば、オンライン版 SL 科目は、実際の現地体験に向けた事前学習としても優れたものになるだろう。

本稿執筆時点において、新型コロナウィルス感染症の影響は未だ大きく、2021 年度の「アメリカ社会活動」もオンラインにて実施をすることになっている。また、国によっても直面する状況は異なり、各種の変異株も生まれていることから、おそらく新型コロナウィルス感染症の発生以前の世界に戻るのは難しく、ニューノーマルと称される新たな社会へと適応していくことが求められる。SL 科目の運用においては、実際の経験や体験を重視しつつ、積極的にオンライン版の SL 科目も展開し、ともすれば繋がりが希薄になる現代社会の中で、人と人との繋がりを様々な手段をもって作っていく必要がある。同時に、今回のオンライン版 SL 科目を運用した結果として、履修者の大半から、実際に行かなければわからない、あるいは実際に行ってみたいという意見があった。その意味においては、本科目のようなオンライン版 SL を実施することによって、実践や経験を重視する SL 科目の意義や重要性が改めて認知される一つの要因にもなった。

謝辞

アメリカ社会文化活動のオンライン版の実施において、桜美林大学サービスラーニングセンターの皆様には、新型コロナウィルス感染症への対応がある中にも関わらず、オンライン版の実施に関わる様々な支援を得た。また、オンライン現地研修の一環として行った「マスクプロジェクト」は、グローバル・コミュニケーション学群現 4 年の太田美風さんを中心に企画されたものである。

注

1　本論における写真や動画は全て公開にあたり許諾を得ているものである。
2　メッセージ動画は以下のアドレスを参照。
（https://www.youtube.com/watch?v=NFiTLQDeD24 accessed 2021-12-2）

参考文献

坂本文子，2021,「宇都宮大学「地域プロジェクト演習」を事例としたサービス・ラーニングの効果—2020 年度オンライン化に伴うプログラム変更と効果測定結果報告—」,『地域デザイン科学：宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要』，Vol.10, pp.231－249.

山崎慎一，2020,「国際理解教育（アメリカボランティア研修）」，授業科目シラバス，桜美林大学

山崎慎一，2021－9－16,「国際交流事業の現況と課題」,『令和 3 年度（通算第 19 回）国際交流推進協議会』，日本私立大学協会

Emily Faulconer, 2021, *"eService-Learning: A Decade of Research in Undergraduate Online Service-learning"*, American Journal of Distance Education, Vol.35（2）, p.100－117, DOI : 10.1080/08923647.2020.1849941

Waldner, Leora S.; McGorry, Sue Y.; Widener, Murray C., 2012, *"E-Service-Learning: The Evolution of Service-Learning to Engage a Growing Online Student Population"*, Journal of Higher Education Outreach and Engagement, Vol.16（2）, p.123－150